

## 定住と移住における牧畜地域社会の変容

### ——中国内モンゴル自治区フバートシャラホショーの事例——

東北大学 何 淑珍

#### 1 目的

内モンゴル自治区の牧畜業はこの40年間あまりで遊牧から定住化へという劇的変容を見せている。さらに、環境悪化・牧草地の劣化が深刻な問題になり、その対策として10年前に草原生態保護政策が打ち出された。

本報告の目的は、草原生態保護政策が実施された2003年から10年経過した今日、飼育形態の変化が牧民の生活および牧畜地域社会にいかなる変容をもたらしたのかを明らかにすることである。

#### 2 方法

本報告は、異なるパターンの飼育形態にしたがって構成された地域社会として、ホト（小集落、概ね5～8世帯から成る。漢語では自然村と表記されることもある）すなわち定住放牧＋畜舎飼育という形態のホトと酪農を営む「移民村」をとりあげる。

対象地である内モンゴル自治区フバートシャラホショーは、内モンゴル自治区の主産業である牧畜産業を主とした純牧畜地域である。

本研究の調査期間は2008年8月から2014年3月までであり、半構造化インタビューに基づく事例調査である。

#### 3 結果

草原生態保護政策いわゆる「三牧」政策の実施によって定住放牧が禁止された地域と季節的に休止された地域が現れ、主に次のいくつかの変化が生じた。①放牧形態として、定住放牧から、定住放牧＋畜舎飼育、「移民村」での酪農経営という新たな形態が現れた。②草原生態保護政策が牧畜地域の都市化政策と重なり、多くの牧民を町郊外の「移民村」に移転させることによって、牧畜地域に大きな人口移動をもたらしただけでなく、牧畜業から第二次産業、第三次産業への移転が図られた。③「移民村」での酪農経営が10年を経過して行き詰ったことへの対応行動として、元のホトに戻る牧民と他産業に移転する牧民が現れ、さらなる人々の移動が生じた。④同じホトにおいて、異なる飼育形態すなわち従来どおりの羊を飼育する牧民とホルシュタインを飼育する酪農経営が現れた。⑤家族内での女性によるチーズ生産がなくなり、専門的にチーズ生産を営む牧民が現れた。

#### 4 結論

草原生態保護政策として打ち出された禁牧、休牧、区画輪牧政策の実施が、牧畜地域に飼育形態の変化と大規模な人々の移動を生じさせた。異なる飼育形態が同ホトにいる世帯間の協同関係に変化をもたらした。遊牧から定住、そして定住から移住といった放牧形態をめぐるめまぐるしい変化の結果、牧民生活の分化とホトという小集落における牧民同士の相互補完関係に変化をもたらすことによって、牧畜地域社会が再編されつつあるといえよう。

#### 文献

フバートシャラホショー統計局編, 2011, 『フバートシャラホショー統計年鑑』.

何淑珍, 2014, 「内モンゴル自治区における定住放牧者の牧畜観——シリングル盟フバートシャラホショーの事例——」『社会学研究』93:153-175.